

2025年度 公募制推薦入試後期日程 試験問題 (12月14日)

国 語

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答用紙には、解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。

① 受験番号欄

受験番号(英字及び数字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。
正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

② 氏名欄

氏名を記入しなさい。

③ 解答科目欄

解答する科目を1つ選び、科目の下の○にマークしなさい。マークされていない場合又は複数の科目にマークされている場合は、0点となります。

- 4 解答は、解答用紙の解答欄に1つマークしなさい。例えば、

5

と表示のある問いに対して⑦と解答する場合は、次の(例)のように解答番号5の解答欄の⑦にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
5	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国

語

(解答番号

1

～

30)

問題文の中の「*」の記号は、原文にあったその直後の文が省略されていることを示しています。解答にあたって考慮する必要はありません。

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、出題の都合により、一部省略・改変したところがある。

Living for Today——その日その日を生きる——は、なんら特別な生き方ではない。あらゆる人間はみな、その日その日を生きている。それを **a** ソウキしていいだけだ。ソウキすることを先延ばしにしているのだ。わたしは明日死ぬかもしれないし、明日人生が一八〇度変わるような恋に落ちるかもしれない。明日のことは誰にもわからない。まして一年先、一〇年先の未来などわからない。何かの拍子に、その日その日を生きている、Living for Todayなわたしの実感が、生々しくわたしの身体をゾワゾワとさせる。^{*}

最小限の努力で生きる農耕民の世界

わたしがLiving for Todayなるものに学術的な関心を抱いたきっかけは、二〇一三年二月に故人となった京都大学名誉教授の掛谷誠先生の講義だった。掛谷は、一九七〇年代初頭にタンザニアの焼畑農耕民トングウェ人の生計経済を調査し、彼らの生計維持のしくみを、「最少生計努力」と「食物の平均化」の二つの傾向性を切り口にして論じた。四〇年以上も前の論文だが、いろいろな意味で **i** の心に強く残ったものなので、少し詳しく紹介したい。

トングウェ人は、タンガニーカ湖の東岸部から東へと広がる乾燥疎開林に暮らす農耕民である。掛谷が調査に入った一九七〇年代当時は、いまだ現金経済はあまり浸透しておらず、トングウェ人は焼畑農耕、狩猟、漁撈、蜂蜜採集など自然に大きく依存した生業によって、基本的に自給自足の生活を送っていた。 **ii** はトングウェ人の生業を綿密に調査し、彼らが年間の推定消費量ぎりぎりしか主食作物を生産していないことを明らかにする。さらにトングウェ人は、森林と森林後退後の二次性草原だけを開墾し、広大な熱帯降雨林やサバンナを農耕の対象とはしていないことや、どのような食べ物が好きかにかかわらず、いちばん手近で簡単に入手できる食糧資源に強く依存する傾向があることも明らかにする。

「アトングウエ人は、できるだけ少ない努力で暮らしを成り立たせようとしている」という iii の発見は、当時の iv には衝撃だった。 A 心がついた頃から「努力」とは最大限にするものであり、努力に「最少の」がつくのは、なんだか語義矛盾に思えたのだ。

最少生計努力の原則は、 v たちに自然の改変を最小限にとどめ、原野の自然と共存しながら暮らすことを可能にしてきた。挨拶に長い時間をかけ、近隣の村々をぶらぶら訪ね歩くことを楽しみとしている人びとの暮らしは、どれだけ多くを生産できるかを競い合いながら、日々の生活に追い詰められているわたしたちの資本主義社会とはまったく異なる世界に思えたものだ。

しかし講義を聞くうちに、長閑な農村は い おどろおどろしい世界に一変する。 vi は最少生計努力を、自然とともにのんびりと暮らす生き方としてではなく、社会を生きるうえで誰しもが抱くだろう人間の基本的な感情——嫉妬やうらみ——と、それに起因する呪いに光をあてて説明したのだ。

掛谷が B 示したことは、トングウエ人は、集落の住民が食べられるだけの食糧しか生産しないにもかかわらず、集落を訪れる客人をもてなすために、生産した食糧の四〇%近くも分け与えていることである。この客の接待に要した食物量は、自分たちもほかの集落に旅に出かけ、もてなしを受けるため、通常は帳消しになる。 C 客人がいつ何時、何人くらい訪れるかはあらかじめ計算できないし、 D 計算しないものである。

E 、生産量と消費量の危うい均衡が崩れ、しばしば食物が欠乏してしまう事態にも陥る。そのような事態に見舞われた集落の人びとは、近隣の貯えのある集落 たくわ に行き、食物を乞う。そして貯えを分け与えた集落も、あとになって、ほかの集落に食べ物を乞いに行かねばならなくなるというレン b サが生じる。「食物の平均化」とは、このようなくみで集落間の生産量の不均衡が縮小していく事態を示したものだ。

分け与えることの道徳？

ところで、この最少生計努力と食物の平均化の二つの傾向性は、超自然的な世界と関係を持つている。「分け与える」に反する行為は、人びとの妬みやうらみの対象となり、ときには分け与えない者に対する呪術を発動させる。この妬みや呪術に対する「畏れ」ゆえに、人びとは食物を分け与える、と掛谷は指摘した。掛谷は、住民の間で好まれている特殊な野菜を誰も積極的に栽培しようとしないう理由として、「一軒だけで栽培しようとする」と、結局はほかの人びとに乞われて、ほとんど全部持っていかれてしまい、何のために栽培したのかわからなくなるからだ」という村人の語りを紹介している。

同じように、もし人びとに気前よく分け与えることが慣例であり、分け与えることを拒否する **C** ホウトがほとんどなければ、ほかの人びとよりも多くの努力を費やしてたくさんのお金を生産した人間は、少なくとも短期的、経済的意味では損をするだろうと、わたしたちは考える。なぜなら、ヨ **d** ジョウに生産した食物は自分のものにはならず、自分より働かなかった誰かのものになるからだ。あからさまな **(3)** フリーライダーを **(4)** 決めこむのは難しくても、合理的経済人ならば、ほかの人びとと同じだけしか働かないだろう。そして村人全員が、ほかの人びとと比べて損をしないよう「いかに努力をしないか」を競っていけば、結果として最小限の努力でギリギリの生計を維持しようとする社会になる。

1 このような事態は、しばしばわたしたちの仕事場でも起きる。たとえば、仕事をしない同僚に、なぜわたしばかり働いているのかと不満を抱く。ほかの人より多く働いても給料に違いが出るわけではなく、早く仕事を終わらせても新しい仕事が降ってくるだけのこと。出世の道が開けているわけでもない。それどころか仕事をさっさと片付けていると、同僚から「あなたのせいでわたしたちがサボっているように見えるじゃないか」などと恨まれる。ならば、同僚と同じようになるべく仕事をしないで、その時間を自分の好きなことに使ったほうがいい、と考える人はいるかもしれない。

現在の資本主義経済で企業が生き残っていくためには、最少努力が全面化したワーク環境は不健全だとされるだろう。【V】実際にアフリカ農村における「分け与える」をめぐる規範と呪術を伴う妬みの機能は、その後「アフリカ的な停滞」と深く関わる人びとの精神世界や行動様式、社会関係を明らかにする研究へとつながっていく。【W】一九八〇年代にゴラン・ハイデンは、植民地期から社会主義期に至る農村変容を明らかにするなかで、最低限の生存維持を最優先した小農型の生産様式と、血縁

や地縁などを基盤とする互酬的な交換に着目し、再分配を通じた相互扶助システムを「情の経済」と名づけた。そして、この情の経済こそが、アフリカ諸国の発展を阻む要因となっていることを論じた。【x】

情の経済論はその後、一部のアフリカ研究者に、分かち合いをめぐる利他的な道徳的傾向性として再解釈された。【y】掛谷自身も、その後にアフリカの地域発展を模索する研究へと向かい、平準化は、社会全体の発展を「押しとどめる」動きばかりではなく、条件さえ整えば、変わり者が始めた新規の農法を一気に広めるなど、社会全体を「押し上げる」動きともなり、内発的な発展を促進する動力ともなることを論じている。【z】

わたしは正直なところ、上記のような解釈、世界観に魅力を感じることができなかった。掛谷らの世代にとっての「オルタナティブな世界と、わたしの世代にとってのそれとの距離感もあったのだろうが、わたしには嫉妬や呪いにより平準化されていく社会は、たとえ共同体のすべての人びとの生存がホシヨウされようと、自然との共存が可能であろうと、時間的ゆとりがあらうと、生きづらい社会に思えた。みなが同じであるよう競争が抑圧される社会は楽しいものに思えなかったし、少なくとも食べ物や富を与える―乞うといった関係は、負い目を伴うなど面倒なものに感じられた。ただ一方で、掛谷が楽しそうに語る、たくましく生きる彼らの社会における嫉妬やうらみは、現代人が考える損得や「富」に起因するものではないのではないかと考えていた。

わたしは指導教員が勧める農村社会での調査はせず、グローバル資本主義経済の末端で、市場経済の論理にがっちり組み込まれて商売をする都市の零細商人を研究した。都市研究を志したわたしは、当時の大学院の風土からすると異端だったが、互酬的な関係性や分かち合いの論理は、零細商人の世界でもかたちを変えて存在していた。そして、市場経済が深く浸透した現代都市の商世界で暮らしてみても、いま一度、最少生計努力や平準化について別の解釈を試みたくなった。

その前に、やや唐突であるが、円環的な時間について、哲学者の内山節氏の『時間についての十二章』（岩波書店、二〇一一年）を取り上げたい。本書は、一九九〇年代の日本の農村、群馬県多野郡上野村を一つの舞台として書かれた時間論である。内山は、人間の存在自体が時間的な存在であると述べ、自然や他者との関係的時間が実態的時間に変容する過程のなかに、近代の

成立をみる。

内山によれば、近代化とは、時間を等速的で不可逆なものとして客体化し、時間が価値の基準となる、時間の合理性が成立する過程である。たとえば、工場や会社での賃労働は、時間によって労働力を売るだけでなく、時間そのものが労働者の売るべきものとなった、すなわち人間が自然や他者との関係のなかで主体的に「多様な時間」を創るのではなく、等速的な時間に人間の行為や関係が管理・支配されるようになった世界の「**才**産物」だ。余暇も「時計の時間」の一つの使い方に過ぎないから、わたしたちは依然として時間によって動かされている。内山は、こうした時間からの「**F**性の剥奪こそがわたしたちの生きづらさを生み出しているとし、時間を客観的秩序から関係的存在へと再び戻すことで、ふたたび人間を時間から解放することを説く。

彼がフィールドにしている上野村において時間は、ときに荒々しく、ときに漂うように流れている。村人たちの畑仕事には濃密な時間とまるで惚けたような時間がある。ここには、賃労働を支配するような「時計の時間」ではなく、揺らぎゆく時間が成立しているという。また人びとは、不可逆的な縦軸の時間とともに、一年前と同じ春や秋がふたたび「**f**カイキし、去年と同じ春の畑仕事や秋の収穫を繰り返す円環的な横軸の時間を生きている。今年も実りの秋を迎えたという喜びは、村人たちみなのものである。自家消費用の畑の作物は、自分が必要としている量の二倍つくるのが農家の自然の慣習で、余った分は知人に配ったり、不作の家があったときはそこへ回したりするのが普通だという。内山はこれを、「**カ**農村の「アソビ」であると指摘する。だが、みなで実りを分かち合う暮らしの豊かさは、作物が商品として出荷された瞬間に消え去り、数カ月かけて育てた作物の対価としてはあまりにも少ない貨幣へと「**G**されてしまう。だから、上野村の人びとは必ずしもすべての作物を商品として出荷しないし、仕事を時間あたりの労働投下で換算しうる「稼ぎ」とは異なるものとしているのだという。

Living for Today ヌルン

タンザニアの焼畑農村は、四季折々で変化をみせる日本の「里山」とはずいぶん自然のリズムが異なるが、「○○さんはお変

わりありませんか」という挨拶が、対面する相手自身から始まり、家族、友人、隣人、健康、仕事に至るまで長々と確認されていく世界は、刻々と変化する縦軸の時間よりも、横軸の時間のほうが優先しているようにみえる。少なくとも商品経済が現在より浸透していなかった一九七〇年代には、時計の時間で農業を営み、時間あたりの労働力の投入量にふさわしい収穫や富を得るといった感覚は希薄だっただろう。

だが、タンザニアの農村のアソビは、上野村の人びとのように「収穫はともに実りの時期を迎えたみなものだ」「ヨジョウ分は不作の農家に回す」を前提に成り立ってはいないようだ。それならば、「最少努力」で臨まずに、上野村の人びとと同じように自家消費量の二倍の作物をつくればいいように思う。むしろ ^キアフリカ農村のアソビは、不作の年もあるし、みなが同じように生産できず、食べられない人びとが生まれることを知りつつも、何らかの共同体的な関係を前提としてどれくらい生産するかをあらかじめ計画しない点、すなわち「どうかあったら、そのときに対処する」という Living for Today の生き方から出発しているのではないだろうか。そう考えると、嫉妬やうらみによる平準化の圧力は抑圧ではなく、自然や社会との関係的に存在する時間を操る ^ク生き方の技法として解釈を展開できる。

わたしは、農村から貧しい出稼ぎ民が流れてくるタンザニアの都市居住区に住んでいた頃、昼どきよりもずっと早い時間に来た客人を延々と引き止め、「ご飯を食べていけ。食べていくまで帰さない」などと説得する場面に頻繁に出くわした。路肩でご飯を食べている見知らぬ人から、突然「一緒に食べよう」と食べかけの皿を差し出されたことも何度もある。

ただ、家族ですら食べるのがやっとな家計に余裕などないので、じっさいに客が何人も頻繁に来れば、自分たちの食べるものがなくなる。また、いつも客人をもてなすのが好きなわけでもないようで、米や肉など高価な食べ物はビニール袋を二重にしなければないように買ってくるし、近所の人に目撃されると、いかにお値打ちだったかを説明して、ねだられたり嫉妬されたりしないように気を配っていた。

つまり彼らは、来てしまった客や、ご飯を食べているのを見られてしまった人を、そのときに食べているものを分け与えることでもてなす、あるいは嫉妬をかわすのであり、それはホスピタリティであり、社会関係をやりくりする技法でもある。分け与

えることはあらかじめ予想した出来事というより、降りかかってきた定めである。そして、そのような偶然や出会いに対処することが、ときには楽しみになっている。来るかどうかわからない客である限りは、ヨジョウを準備したり思い悩んでも仕方がないし、起きてしまったことは何とか対処しなくてはならない。さらにその結果、わが身が困った事態におかれても、何らかの用事をひねり出して誰かの家を訪問したり、さりげなく誰かに分けてもらうことができる。

ふだんは「何とかなるはずだ」という信念にみずからの生存を懸け、過度に自然や社会関係を改変せず、未来に思い悩まず「自然」のリズムでまったり暮らしながらも、いざというときは、呪術や超自然的な事象との関係も駆使して切り抜ける。そのように解釈すると、彼らはたゆまぬ時間の流れのなかに緩急を生み出しながら、なかなかスリリングに生きている、時間をあやつる ケ 達人のようにもみえるのだ。

(小川さやか『その日暮らし』の人類学 もう一つの資本主義経済) による)

問一 二重傍線部 a～f のカタカナを漢字になおすとき、もっとも適当なものを次の中からそれぞれ一つ選べ。

a	ソウキ	①	創
b	レンサ	①	差
c	ホウト	①	方
d	ヨジョウ	①	情
e	ホシヨウ	①	償
f	カイキ	①	回
		②	会
		③	快
		④	改
		⑤	開
		②	早
		③	総
		④	想
		⑤	宗
		②	査
		③	沙
		④	詐
		⑤	鎖
		②	法
		③	芳
		④	砲
		⑤	包
		③	乘
		④	讓
		⑤	丈
		④	障
		⑤	礁

6 5 4 3 2 1

問二 波線部(い)～(に)の意味としてもっとも適当なものを、次の中からそれぞれ一つ選べ。

- (い) おどろおどろしい
- ① ほんやりと震かすんでいる様子
- ② 落ち着きの無い態度を見せる様子

7

- ③ ひどく不気味な印象を与える様子
- ④ 悪いことが起こりそうな様子
- ⑤ 怯おびえて縮こまっている様子

(ろ) フリーライダー

- ① 周囲の負担に無関心な人
- ② 積極的に仕事を怠ける人
- ③ 食糧を他者に依存する人
- ④ 対価を払わず利益を得る人

8

(は) 決めこむ

- ① うまいことを言っただます
- ② 思い込んで決めつける
- ③ 行動や態度を押し通す
- ④ わきから口出しをする
- ⑤ 感情や意図を決定する

9

(に) オルタナティブな

- ① 主流となる
- ② 代替となる
- ③ 信頼に足る
- ④ 相互に作用する
- ⑤ 唯一無二である

10

問三 空欄

i

vi

には「わたし」「掛谷」「トンゲウエ人」のいずれかが入る。「わたし」が入る箇所として

11

- ① i
- ② i
- ③ i
- ④ i
- ⑤ ii
- ⑥ ii
- ⑦ iii
- ⑧ iv
- ⑨ v
- ⑩ v
- ⑪ vi
- ⑫ vi

問四 傍線部ア「トングウエ人は、できるだけ少ない努力で暮らしを成り立たせようとしている」という説の根拠として**適当でないもの**を、次の中から一つ選べ。

12

- ① 広大な熱帯降雨林やサバンナは農耕の対象とはしていないこと
- ② 年間の推定消費量ぎりぎりしか主食作物を生産していないこと
- ③ 森林と森林後退後の二次性草原だけを開墾すること
- ④ 乾燥疎開林に暮らす農耕民であること
- ⑤ いちばん手近で簡単に入手できる食糧資源に強く依存する傾向があること

問五 空欄 **A** に入る漢字としてもっとも**適当なもの**を、次の中から一つ選べ。

13

- ① 真
- ② 里
- ③ 物
- ④ 気
- ⑤ 関

問六 空欄 **B** **E** に入る語句としてもっとも**適当なもの**を、次の中からそれぞれ一つ選べ。ただし、同じものを二度用いることはできない。

- ① しかし
- ② そのため
- ③ いうなれば
- ④ まず
- ⑤ ふつう

B 14

C 15

D 16

E 17

問七 傍線部イ「このような事態」とはどのようなことか。もっとも適当なものを次の中から一つ選べ。

18

- ① 得られた成果が、より働いた誰かのものになること
- ② 最小限の努力だけで、豊かな生計を獲得できること
- ③ 誰もが皆、最小限の努力しなくなる事
- ④ 努力しなければ、短期的、経済的意味で損をしてしまうこと
- ⑤ 住民の間で好まれている特殊な野菜が、積極的に栽培されること

問八 [v] ~ [z] のいずれかに「それは端的に「停滞」に結びつけて語られる。」の一文が入る。その箇所としてもっとも適

当なものを、次の中から一つ選べ。

19

- ① [v]
- ② [w]
- ③ [x]
- ④ [y]
- ⑤ [z]

問九 傍線部ウ「情の経済」について述べた文として適当でないものを、次の中から一つ選べ。

20

- ① 情の経済論とは、再分配を通じた相互扶助システムをめぐる学説である。
- ② 「情の経済」こそがアフリカ諸国の発展を阻む要因になっている、と論じられた。
- ③ 「情の経済」は、植民地期から社会主義期に至る農村変容を明らかにするなかで命名されたものである。
- ④ 情の経済論は、一部のアフリカ研究者によって、利他的な道徳的傾向性としてのちに再解釈された。
- ⑤ 「情の経済」がゴラン・ハイデンにより推奨されたのは一九八〇年代である。

問十 傍線部エ「魅力を感じる」ことができなかつた」という理由に当てはまらないものを、次の中から一つ選べ。

- ① みなと同じであるよう競争が抑圧される社会は、楽しいものに思えなかつたから。
- ② 嫉妬や呪いにより平準化されていく社会は、生きづらい社会に思えたから。
- ③ 条件を整えて内発的な発展を促進しようとする、掛谷の論の強引さに疑問を感じたから。
- ④ 食べ物や富を与える―乞うといった関係は、面倒なものに感じられたから。
- ⑤ 掛谷らの世代にとってのオルタナティブな世界に、共感しにくかつたから。

21

問十一 傍線部オ「産物」に相当するものは何か。もっとも適当なものを次の中から一つ選べ。

- ① 人間の行為や関係
- ② 近代化
- ③ 時間の合理性
- ④ 工場や会社での賃労働
- ⑤ 人間

22

問十二 空欄 F に入る語としてもっとも適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ① 個体
- ② 客体
- ③ 全体
- ④ 主体
- ⑤ 身体

23

問十三 傍線部カ「農村の「アソビ」」に該当する事柄としてもっとも適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ① 「多様な時間」が、ときに荒々しく、ときに漂うように流れること
- ② 自家消費用の畑で、自家消費量の二倍の作物をつくること
- ③ 去年と同じ畑仕事を繰り返すこと
- ④ 数カ月かけて育てた作物を出荷することで対価を得ること
- ⑤ 仕事を労働時間あたりの労働投下で換算しうる「稼ぎ」とすること

24

問十四 空欄 **G** に入るもつとも適当な語を、次の中から一つ選べ。

- ① 消化
- ② 計算
- ③ 相殺
- ④ 両替
- ⑤ 還元

25

問十五 傍線部キ「アフリカ農村のアンビ」が生まれる背景には何があるというのか。もつとも適当なものを次の中から一つ選べ。

- ① 食べられない人びとが生じることを承知で、余分に生産しようとする姿勢
- ② 「どうかなったら、そのときに対処する」という在り方
- ③ 家族や友人、仕事に至るまで長々と確認していく挨拶
- ④ 季節のある日本の「里山」と共通する自然のリズム
- ⑤ 労働時間に見合った収穫や富を得る感覚が希薄な時代性

26

問十六 傍線部ク「生き方の技法」とは、例えばどのようなことか。その例としてもつとも適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ① 食糧を分け与えることで、客人をもてなし嫉妬をかわすこと
- ② 客人がいつ来ても対処できるように、準備だけはしておくこと
- ③ 自分たちの食べるものを確保するために、客の食事を減らすこと
- ④ 「一緒に食べよう」といって、食べ残した食事の皿を押しつけること
- ⑤ 食べるものがなくなったら、誰かが分けてくれることを信じて待つこと

27

問十七 傍線部ケ「達人のようにもみえる」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを、次の中から一つ選べ。

28

- ① 分け与えることを定めとし、そのことで我が身が困ることも受け入れて、誰にも頼らずに途切れることのない時の流れのなかを粛々と生きているから。
- ② 食べるものがなくなれば知り合いの家を訪ね回るが、先方にも都合があるし決して無理なことは言えず、お腹を空かして悠久の時間を生きているから。
- ③ 未来に思い悩まず、いざとなれば呪術なども駆使して切り抜け、たゆまぬ時の流れにメリハリをつけてそのときどきを刺激的に生きているから。
- ④ 家族が食べることをすらやっただとしても客人を受け入れ、米や肉など高価な食べ物でさえ遠慮なくふるまい、客人のほうに時の経つのを忘れてしまうから。
- ⑤ 過度に自然や社会関係を改変せず、決して未来に悩まず自然と共存し、人間関係に束縛されることなくマイペースに生きているから。

問十八

本文の内容に合致するものを次の中から二つ選べ。なお、解答の順は問わない。

- ① 「努力」は最大限にするもので、努力に「最少の」がつく学説は淘汰とうたされた。
- ② 筆者はグローバル資本主義経済の末端で商売をする都市の零細商人を研究した。
- ③ トングウェ人は熱帯降雨林やサバンナを開墾し森林後退後の二次性草原は農耕の対象にしなかった。
- ④ 内山によれば、余暇も「多様な時間」の一つの使い方にすぎない。
- ⑤ Living for Todayとは、明日のために、その日その日を大切に生きることである。
- ⑥ アフリカ農村のアソビでは、降りかかってきた定めへの対処がときには楽しみとなる。
- ⑦ 平準化は、変わり者が始めた新規の農法を一気に広めるなど、確実に社会全体を「押し上げる」動きとなる。
- ⑧ トングウェ人は、儀式として近隣の村々をぶらぶら訪ね歩いている。

29

30

